

剣道最高位 八段合格
宮城県警察本部

名生伊智郎



Miyou Ichirou

1969年12月27日、迫町小金丁生まれ、49歳。身長170^{cm}、体重72^{kg}。佐沼小から佐沼中、佐沼高と進学し、東洋大学を経て1992年4月に宮城県巡査を拝命。現在は宮城県警察本部警務部教養課に所属し、指導官として剣道や逮捕術などの指導に当たっている。

努力の継続 その先に咲いた花

「合格したときは信じられませんでした。うれしい気持ちはありますが、喜んでばかりはいられません。これからは模範となる立場なので、身が引き締まる思いです」と凛とした表情を見せた。

剣道最高位となる八段審査会は2018年11月30日、日本武道館で開かれ、迫町出身の名生伊智郎さんが5度目の挑戦で八段に合格。県内では最年少となる48歳で昇進を決めた。剣道八段の審査は「日本で一番合格率が低い試験」といわれ、その合格率はわずか1%以下。名生さんが合格した審査会では1114人が受審し、合格したのは8人で合格率は0.7%だった。

剣道を始めたのは小学5年の時。「落ち着きがなかったので、礼儀正しくなるようにと母から勧められました」と剣道との出会いを振り返る。6年生の時には全国大会に出場。上位入賞を果たし、優秀選手賞を受賞するなど、始めて1年で早くも頭角を現した。その後、中学、高校でも全国大会に多数出場。佐沼高校卒業後は、東洋大学剣道部の門をたたき、全日本学生剣道優勝大会でベスト8進出を2回果たした。「大学卒業後は生まれ育った宮城県に戻り、剣道を生かした仕事がしたい」と警察官になる道を選んだ。

大学卒業時に剣道四段だった名生さんは、警察官になってからも、さらなる高みを目指し、七段まで一発合格。36歳という若さで七段に駆け上がった。八段の受審資格は七段に合格した

10年後。受審資格を得た16年、自分の力がどこまで通じるか八段の審査会に挑戦した。

審査は2分間の立ち合い形式で実施されたが、結果は1次審査で不合格。その後も、年2回開催される審査会に挑戦し続けるが、4度続けて1次審査で不合格となった。剣道の世界では「八段審査の1次審査に合格して真の七段」といわれており「自分の実力は七段にも届いていない。このままでは絶対に合格しないと、それまで週2回程度だった稽古のほかに、勤務前の早朝稽古に毎日励んだ。「これまでは、いい立ち合いをしよう、いい技を出そう」とし過ぎていました」と自分を分析。自分の剣道をいちから見つめ直し、基本に立ち返って日本剣道形と基本技の稽古を徹底的に繰り返した。

迎えた18年11月、自身5度目の審査会に挑戦。無心で臨めたという名生さんには、崩れない姿勢と攻められなくても動じない不動の心が身に付いていた。「剣道には『打つべき機会』というものがあります。相手の出頭に合わせ、自然に体が反応し、自分を信じて全身全霊を込めて打ち切ることができました。あのときは心・技・体が充実していたと思います」と振り返る。

受審者の90%以上が不合格となる1次審査を見事突破。気負うことなく平常心で臨むことができたという2次審査も合格した。最終試験は日本剣道形の審査。「形は動きも大切ですが「心」が込められているかが重要です。呼吸を

意識して一つ一つ丁寧な動作を心掛けました」と話す。結果は、0.7%の壁を打ち破り、県内で最年少の合格。全国的にも例が少ない40歳代で合格という快挙を成し遂げた。毎日の努力と稽古の積み重ねが実を結んだ瞬間だった。

私の剣道の基礎をつくってくれたのは、佐沼中時代に毎日夜遅くまで厳しく指導していただいた氏家良人先生のおかげです。稽古がたつらくて何度もやめたいと思ったこともありましたが、努力し続けることの大切さを学びました。指導する立場になった今、次世代を担う若い人たちには、技術だけではなく、努力を継続することの大切さを伝えていきたい」と自身の経験を次世代へ継承することを誓う。

「私も試合で勝てない時期がありました。そういう結果になろうと努力を積み重ねていけば、いつか大きな花が咲くと思います。結果ばかりを求めてしまいがちですが、感謝の気持ちを忘れずに努力を継続することで、技術だけでなく人として成長できると思います。そして、それが人生で大きな財産になるはずですよ」と次世代のアスリートたちへエールを送る。

「これからは、八段としてふさわしい人間であることが求められます。さらに精進し、剣道の発展に貢献していきたいです」。

最高位の八段を取得しても慢心することはない。これからも剣道と正面から向き合い、高みへの階段を一步ずつ上り続ける。